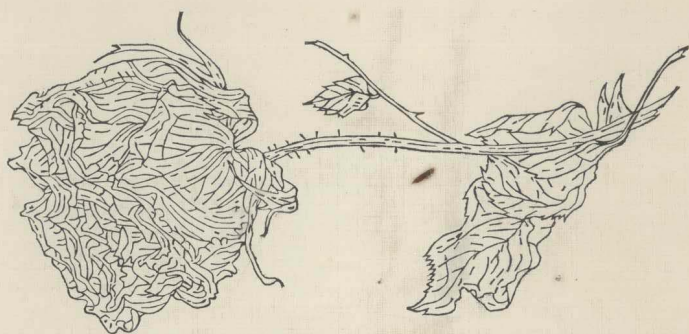






薔 薇の眠り
田久保英夫

中央公論社

薔薇の眠り

換印廃止
©一九七二

定価六八〇円

昭和四十七年三月二十日印刷
昭和四十七年三月三十日発行

著者 田久保英夫

発行者 山越 豊

印刷 三晃印刷

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一
電話(五六一)五九二一
振替東京三四

目次

薔薇の眠り

3

光る朝

95

悪い掌

113

不在の時

157

指の世界

177

あとがき

裝幀
村上芳生

薔薇の眠り

僕はまるで青銅製の小鳥のように、優雅にガラス棚におかれている古風な振鈴を見て、息をつめた。三十分前まで、敬虔に寝棺をのぞきこむような姿勢で、その展示ケースを眺めていた閲覧者たちもいない。その書籍の埃やインクで汚れた指の跡ののこるガラスの奥に、真珠色の貝象嵌の櫛とか、風見鶏が屋根上についた置時計とか、孔雀の彫りものの入った文鎮とか、青銅の小さな卓上鈴とか、ひっそりと並んでいる。それは明治の文明開化期に西洋から入った美術工芸品を、この公立図書館で週替りに展示したものだ。僕は天井の照明も消えて、コンクリートの柱の蛍光灯の稀薄な光に浸った振鈴を眺め、それを土曜日、同僚が部屋で桐箱から出した時、小さな響きで鳴ったのを思い出した。可憐な音叉の音、嬰ハ音の響きだ。僕はその時思った。病気で呆けたように寝ている祖父に、聞かせたらどうだろう。

僕は今も自分の手で、その卓上鈴を鳴らしてみたい気がして、ガラスを指で撫でた。もう半年前も、祖父は蒲団の上で閉じていた眼を突然ひらき、「リン。リンだ。リン……」と骨ばった鰭みたいな掌を振った。リン。鈴のことだろうか。僕は家にある猫の鈴だの、押し釘つきの卓上ベルだの、錆びた風鈴だの、あらゆるヘリンをさがし出し、祖父の耳もとで鳴らした。どんより濁った眼のなかに、一脈健康の時のような知覚の光が蘇らないかと……。だが、どれもむだだった。この青銅の優雅な振鈴なら、どうだろう。この古び方は祖父にぴったりだ。嬰ハ音の音。それは祖父の内部の闇で、僕ら人間どもと反響しあう小さな音律とならないだろうか。

僕の頸すじの皮膚へ、酒精で拭くように冷たい空気が吹きこんだ。若い館員たちが、玄関のガラス扉を肩でおして、帰っていく時、外から流れこんでくる寒気だ。冬の闇が、扉のむこうで屋内の微光と柔かく合歓している。僕は掃除婦が二人、石床をモップでこすっている閲覧者の入口をぬけ、ガラス扉をおした。

尖った棘のような寒気が、瞼や唇の上へほとんど厳肅に触れた。僕はそれが気持よくて、外套の襟をひろげた。船の機関室みたいにむっと暖房のこもる館内。埃と微の匂いの漂う書庫。僕はそこがけっして嫌いでないが、時おり自分がその生暖かい閉塞した場所に、怖ろしいほど馴れきっていることに気づくのだ。今がそうだ。僕はまるで人なつこい家畜みたいに、どんな事象にも馴れてしまう。この刑務所の塀そっくりの図書館の外回廊にも。自分の走禽類のように長く肉の

うすい手肢にも。大学を中退して、ここに勤めはじめた時の苦痛にも。三年前祖父が家の上り框で丸太みたいに倒れた時の驚きさえ、すっかり馴れ薄らいで、今は祖父が早く死んだ方がいいと思っている……。

自分の登音を、石壁に反響した登音が追ってきた。それも僕自身、いつも聞き馴れた響きだが、今自分が毎朝毎夕ここを一人で通り、書庫や出納室でもほとんど無言なのに初めてのように気づいた。事務的な必要なこととはもの柔かに短く話すこと。同僚との話はいつもわずかな微笑で答えること。こんな習慣や癖の深い穴の底に自分がいた。他人をけっして忌避する意識はないのに、気がつくと、他人を厚い皮膜で隔てているのは不思議だ。子供の時からだろうか。僕は不意に自分に怖れを感じた。この夜の闇がしだいに濃密さをますように、自分一人、他人たちから遠い空間に在るのを感じた。

僕は門柱の蔭に足をとめ、ひろい坂の下に流れる車のライトの條を眺めた。その街路のむこうは外濠で、対岸に電車の高架ホームが燈火で飾った軍艦のように見えた。僕はいつも坂下の、明るい街路をぬけて、その電車に乗るが、今急に別の道を行きたくなった。まだ通いはじめの頃、図書館の沈鬱な石壁の間を出て、明るい店舗の軒下を行くのに、新鮮な心のはずみを覚えたが、今はそれにも馴れていた。僕は十分ほど廻り道した時の、家の状態を考えた。今日は週に二度、洗濯や掃除にきてくれる大里という寡婦がいる筈だ。僕が少し遅れると、夕食作りをすませ帰り

支度をしながら、じりじりして待つだろう。所在なく寢床の祖父に、話し古した身の上話を喋りたてるだろう。祖父はじっと仰むき、言語麻痺で「やめろ」と言えないまま、しだいに眼に物狂おしい光を浮べるだろう。僕は急に十分間の気まぐれに、輝かしい誘惑を感じ、目のまえの横断歩道をわたった。

僕は大きな病院の煉瓦塀にそって曲った。それは大学の附属病院で、塀内に象皮色の建物が歩廊つづきにならび、槇の重い葉群が風にそよいだ。僕はその狭い道が初めてで、片側に私立の子学園の校庭があるのに気づき、その人けない運動場から吹きつける風に頬の肌を粟だてた。金網の柵の中に、何か競技に使ったのか、藁を白い布でくるんだ等身大の人影が一つ転がっていた。白い顔に黒く目鼻が書いてあるのが、暗がりでもわかり、屍体みたいで気味悪かった。僕は病院の象皮色の建物に、注意をそらした。その建物はどれも窓が狭くて、鉄格子のなかは灯もなくしんとしている。僕はその建物には、本物の屍体が入っているような気がしてきた。病院で死んだまだ新しい屍体。あるいは幾つもガラス壘のならぶ標本室でもあろうか。酒精に漬った成人の腸。眼球。肺臓。胎児……。

外燈の明るい玄関まえへ出た時、僕は自分がその明るさに激しく渴いているのに気づいた。いや、その光の中にある何かに。僕はそれを、玄関の大きなガラス扉越しに見える人影に求めた。もう診療時間は終わっている筈だが、救急の患者か見舞客だろうか。ガラス扉をおして、一人二人

短い石階段を降り、ひろいコンクリート床の車寄せへ行く。そこには黒い乗用車やワゴン車が四、五台駐車していた。

僕の眼は、ガラス扉のすぐむこうに動くオレンジ色の外套の裳裾に吸いよせられた。いや、その光の圏内に一步入った瞬間、オレンジの色彩が僕を襲ったと言っている。それは初め色彩と動きの刺激だけだった。その外套の主は、看護婦らしい白衣の女と立話していて、全身が相手の背中で隠れ、ひろがった裳裾だけ見えるのだ。僕が思わず階段の方へ近づくと、細くしまった胴と、短めの裾下の膝小僧が見えた。膝の皮膚はなめらかに白く、すぐその下まで亜麻色の粗い毛糸の靴下が蔽って、話すたびにそれらが小さく動いていた。動く。動く。僕が不思議な生命体を見るように、そう思った時、一瞬ガラス扉が回転して、外套の女の全身が現れた。

小さな顔と、草食獣みたいな眼をした娘だった。看護婦の方へ軽く手をあげ、その笑顔をまっすぐむけると、僕と正面から視線があった。女はわずかに眼をみはったが、奇妙に微笑はそのまま。僕が咄嗟に、見たことがある、と思った時、

「あら、寒いわね。」と娘はごく自然な声で言った。

「ああ、寒いね。」

「ほら、あそこに夜の霜が降ってる。ね、霜でしょう？」

娘は僕のわきへきて、右手に提げている重そうな古革靴をもち換え、遠くの地面を指した。そ

こは外燈の明りの届かない道路の端で、そう言われれば微かに点々と何か光るものが見えるようだが、霜とも思えない。誰だったろう。僕は相手の記憶を思い出そうとしたが、その時黒塗りの乗用車が駐車場から動いてきて、すぐ目のまえに停った。運転席から中年の運転手がおおり、娘から古革靴をうけとった。その靴はち切れるほど膨らんで、チャックの間から銀色のガウンがのぞいている。

「どこか駄が悪いの。」僕は訊いた。

「いいえ、将行^{まさゆき}がね。ちょっと検査に入院してるの。」

女は当り前のように言い、運転手の開けた後部扉をくぐろうとして、

「どちらまで？ 通りまでお乗りにならない。」

「いえ、どうぞ。」

僕は娘が眼で笑い、そのオレンジ色の駄が燈火を撥ねて、緋鯉のように座席へすべりこむのを見た。運転手が勢いよく扉をしめると、娘はまっすぐ前を向いたまま、もうこっちを見なかった。ガラス窓の額縁ごしに、しずかな真摯さを湛えた灰白い横顔が浮んだ。かと思うと、車は走り出し、すぐ尾燈が道路へ消えた。

誰だったろう。僕は今のわずかな間の出来事に頭を占められて、どこへともわからず歩き出した。ただ視野に、白っぽい光の飛沫だけが見えた。それにしても、相手は僕が誰かわかったのだ。

ろうか。〈将行〉などとなぜ知らない名前を平気で言うのだろう。人ちがいしたのではあるまいか。ではなぜ自分に見おぼえがあるのだろうか。

僕は煉瓦塀の道の暗がり、突然足をとめた。思い出した。古い記憶の堆積のなから、不意に十年前のことが蘇った。僕は高校生で、祖父に都心の公会堂へつれられて行った時、たしかそのロビーで会ったのだ。イギリスの女流バレリーナの公演の晩だ。祖父はある官庁を局長で定年退職したが、その役所関係者の夫人に幕間に会って、四、五分話をした。その時、母親の夫人と一緒にいたのがあの娘だ。たぶん中学一、二年だろう、もっと青白く骨ばった少女だった。

しかし、僕はその記憶より、今しがたの短い出来事になおよく心を奪われていた。この塀下の暗がりで思うと、あれはほとんど瞬間に現れ、すぎ去った光の眩しい夢幻のように見えた。また同時に、何かのすじがき通りに自分があすこへ行き、娘とセリフを交す必然的な舞台のようにも思えた。自分はなぜあの咄嗟の場合、あんなに滑らかに話できたのか。子供の時から、あれほど自然に他人と話せたことがあったらどうか……。

僕は白い人形の屍体の転がった金網の柵につかまり、何度か頭で同じ光景を反芻した。校庭の闇に、その舞台は白々と幻の空間で浮びあがった。

翌日から、僕は帰途ほとんどその病院の道を通るようになった。もう一度、あの娘に出会おうかと思ったのだ。誰か身よりが入院していると言ったから、また玄関で見かけることも、ありえぬことではない。僕自身、祖父の病気で経験があるが、親族が毎日見舞う時間というものは、ほぼ一定の時刻になりがちだ。

僕はそのために、廻り道の十分間より、倍以上の時間を都合した。勤めの退館時刻は、その気ですばやく支度すれば十分や二十分は早められるし、家でも大里がこない日なら、多少帰りが遅れても祖父の口は何の文句も言えはしない。ただ、留守に急な発作でも、と心配して早く帰るわけだし、大里がこない日は僕が晩飯の支度をするから、遅れると、祖父が腹を空かして唸るだけだろう。（まったく祖父の食欲と言ったら、人間と思えない凄まじさだ。）

しかし、僕はその後、女に会えなかった。ほぼ毎日、僕は病院の玄関まで行き、あのガラス屏から夜気の中へ出てくる人や、外燈の明りの下に出入りする車を眺める。あるいは病院本館の屋上の避雷針や、電柱の「安保反対、ハガチー帰れ」と書いた貼り紙を眺める。そして十五分ほど、靴底から腿の皮膚へ寒気の麻痺剤が滲みてくると、また煉瓦塀の道をひき返すのだ。不思議に予期していたような冷静な失望感を抱えて……。僕は何を求めているのだらう。あの娘をか。

あの時と同じ眩いような経験をか。単に自分の日常の馴れた習慣を壊すことをか。

だが、僕は幾日か失望を重ねたのち、不安になった。あの女の身寄りには、もう退院してしまつたのではないか。いくら病院の道をきても、ムダではないか。この考えの与える苦痛が、僕自身何か異常な状態（だが、たぶん他人から見れば平凡な状態）に陥っていることに気づいた。自分があれほど他人との接触を避けていたのに、その自閉的な厚い皮膜にわれ目が生じていた。自分がサナギみたいに、繭を破いて外へ出たがっていた。幼虫の新鮮な柔かい皮膚が、他人を——いやあの娘の声や彩りを強く欲していた。

僕はそうしてあまり何度も頭で反芻するので、あの晩のことはいよいよ現実を超えた輝きを帯びてきた。あのわずかなふた言^{ふたご}みの会話は、僕の内部でくり返されて音楽と変らなくなった。あの窓ガラスの額縁に浮き出た仄白い横顔は、僕が書庫で時おり眺める美術書や詩集の中で見かけた気がして、それを繰ってみた。すると、僕の記憶で飾られたその顔は、クラナッハの貴族の少女に似ていた。

また僕の内部で、あの十年前の公会堂でのことが、今になってしだいに明瞭に、くり返し思い出された。祖父が母親の夫人と話している間、僕と娘はガラス壁に凭れて何か喋った記憶がある。ひどく肉のうすい過敏そうな女の子だった。母親の方も品よく整った顔だちだが、笑うと厚化粧の下から、振ったハンカチのように無数の皺が走った。話し方も丁寧な山の手言葉のくせに、

何か追われるようにせかせか一人で喋った。その夫人たちと別れると、祖父はいきなり、「下種め。娼婦め。」と噛み捨てるように呟いたので、僕はびっくりした。すでに両親を失くしていた僕は、母親に肩を優しく抱えられた少女につよい羨望を感じていたからだ。

——一週間あまりした土曜日、僕は午前中だけの勤めをおえ、煉瓦塀の道を歩いた。今日は大里のくる日で、帰りの時間はあまり気にする必要がなかったが、頭上に雲が厚く垂れて、雪か雨でも降りそうだった。

病院の駐車場は、さすが日中のせいで車が混み、玄関のガラス扉も休みなく人影を映して回転した。僕が習慣的にあたりに黒い乗用車をさがすと、二台あった。あの時、車を詳しく見たわけではないが、今の二台はすこし小型のようだ。僕は外套のポケットに両掌をつっこみ、しばらくそこに立って車や人の動きを見ていたが、突然回転扉に吸いこまれるように、玄関へ入った。建物のなかは初めてで、半ば気まぐれだが、外よりずっと暖かく、人間も多かった。僕は壁ぎわの人の臀部の形にくぼんだ黒いレザー椅子へ腰かけ、ぼんやりあたりを眺めた。

薬局の窓口へ行く者。その待合椅子の列に坐って待つ者。会計口へ行く者。目のまえをたえず男女が通りすぎ、テレビの音や声高な話し声が響いた。まるで病気の繁華街だ、と僕は思った。ストーブの温気と人いきれのなかにいると、僕は突然はげしい孤独感に襲われた。自分が幼虫みたいに皮を破って、他人の方へ出たがっているのに、人なかにいると反対に嘔吐のように孤立感